



# 神金公民館だより

第163号

2023年

10月1日

## ことしの暑さは「災害級」

ことしの夏の平均気温は、1898年の統計開始以降最も高く、この125年間で最高となったとのこと。9月になっても暑さが続き、16日には山梨にも熱中症警戒アラートが発表されました。

災害級の暑さを過ごしてきた身体は、いくぶん過ごしやすい日も増えてきたにもかかわらず、夏バテのようなだるさや食欲不振を感じる場合があります。それは「秋バテ」の始まりとのこと。10月も広い範囲で平年より気温が高いと予想されていますので秋バテを防ぐよう、睡眠や食事に気をつけていきましょう。

### ☑ 秋バテチェックリスト

- ① からだがだるく疲れやすい
- ② 頭がぼんやりする
- ③ 食欲がない
- ④ 朝すっきり起きられない
- ⑤ 不眠気味でなかなか眠れない
- ⑥ 頭痛や肩こりがある
- ⑦ 胸やけや胃もたれがある
- ⑧ めまいや立ちくらみがする

3つ以上  
あてはまったら  
要注意!

出典：LION「バファリンナリ」

## ◆ 神金文化祭展示作品の募集 ◆

10月29日～11月5日に開催予定の神金文化祭の展示作品を募集しています。写真や絵画、書道作品、生け花などを展示予定です。地区内の方々の様々な作品を展示していきたいので、ご協力をお願いいたします。



## 防災への取り組み

9月3日、地区内では防災訓練が実施されました。下小田原区では、集会所に区民が集まり、AEDの使い方や避難時の持ち物などの準備、バケツリレーなどの防災訓練に参加しました。



9月4日、神金小では避難訓練と防災アドバイザーの竹内さんが講師となった防災教室が実施されました。



### ◆神金小からのお知らせ◆

## 芸術鑑賞（寄席）教室開催

- 日時 10月31日（火） 13:30～
- 場所 神金小体育館
- 内容 寄席（わんぱく学校寄席）
- その他 ○上履きを持参してください  
○駐車場は校庭を利用してください

※問い合わせ先 神金小（XXXXXXXXXX）

# 神金の歴史

地元の歴史研究家でもある故飯島卓郎氏が、神金小学校PTA会報「ふもと」に執筆し寄稿した「神金の歴史」をシリーズで紹介します。

## 青梅街道 二

妙見堂を中心に行われた丹波山・小菅と国中との無人交易は、妙見菩薩の御加護の賜と信じ妙見様に対する信仰は厚かったようである。妙見菩薩は嶺の頂上に祀られているがこの佛様は国土を守り、災害を防ぎ、人の福寿を増すご利益があるといわれている。又、北斗菩薩ともいわれ眼の病をも癒すともいわれ、有難い佛様である。

馬の背に毎日重い荷物をつけて急な坂道を上り下りする馬こそ一家の生活の基である。馬が怪我をしないよう、無事であるよう妙見様にお祈りをしたものであろう。当時、馬は非常に高価であり、また運送に携わる大には生活の糧でもあり、家人同様に大切にされ、内馬屋という家の中の土間の片隅で飼われたものである。

大菩薩越えの山路に百体の観音様が祀られていたことを、今は知る大は少ない。雲峰寺の正面石段の左右に六十数体、金比羅さんの前の石段の左右に三十数体、計百体の石の観音様が安置されている。舟形浮き彫りにて高さ五十糎位で、一体毎に番号とその寄進者の部落名と名前が彫ってある。名字のあるものは明治以後補充されたものである。この石佛は昔からあった萩原口の街道中、大菩薩越えの急坂の道を重い荷物を背に上り下りする馬のため、怪我のないよう旅人の行路が安全であるように地元有志の人々が願いを込めて寄進したものである。

この百体の観音様をお祀りするために大きな努力がなされたことが、雲峰寺に残されている寄付帳によって何うことができる。美濃判の大きさと厚さ三糎余りの見るからに立派な帳面である。表紙には「百尊観進名簿」とある。達筆にて観進の趣旨が書かれてあるが、その内容は、大菩薩越えの山路が非常に険阻のため、丹波山・小菅方面に荷物を背負って往復する馬が疲労・砕骨・夭折（早死）し、旅人も難渋する。その災いを取り除くため御佛のご慈悲によって救って貰いたいという意味が漢文体で書かれている。西国三十三番、秩父三十四番、板東三十三番の観音霊場をかたどり、百体の観音像を奉納して馬や人の安全を祈願するので、応分の寄進を願う旨が書かれてある。

\*次ページに続く

# 神金の歴史

これには、弘化三年（一八四六）丙午の春とあり、願主は萩原・小田原とある。その下に直径三糎余の朱印が押されてある。誰の判であるかは分からないが、当時の庶民は黒印しか使用できず、朱印は国主かそれに準ずる人しか使用できなかったもので、甲府勤番筆頭者の、寄付行為をしてよいという許可の判であろう。

世話人は萩原・小田原の人が特に多く、近郷の村々から二・三人宛の名があるが全体で九十五名の大勢である。寄進者は二百余名に及び、大体は近在の住民が多く、遠くは駒飼、一町田中、別田、勝沼の人の名もある。当時としては、大規模のものであったと思う。この勧進帳と石佛を裏付けする供養塔が雲峰寺境内にある。本堂西の勅使門の傍らに東を向いて建てられている。表には上部に西国、秩父、坂東と横にあり、その下に大きく供養塔とある。側面に維時弘化三年丙午八月十七日とあり、裏には信州、高遠、石工、守屋口口、石工北原大吉とある。

当時関東地方では信州の高遠に技術の優れた石工が多数居り、現在本県にある石佛は高遠の石工の作であるものが多いといわれている。雲峰寺から一糎余登ったところに千石平（寺）という地名があるが、ここを過ぎ川を渡ると大菩薩越えの急坂にかかるが、川の手前に座高一米余の立派なお地蔵さんが鎮座している。このお地蔵さんを起点に大菩薩の峠まで人の目につきやすい場所に安置され、通行の馬と人の難儀を除き無事故をお祈り下さったのである。現存している千石のお地蔵さんと百体の観音さんは共に高遠の石工の作であることは間違いないが、大規模の勧進がなされたので、この外にもこの時作った石佛があると思われるが今後の研究課題である。

明治十一年、新しい青梅街道の完成によって柳沢峠越えに変更になったので、この急な坂道を利用する馬や大は少なくなった。人の通らない道は荒れるもので、百体の観音さんも砂や草に埋まったり無くなったりするもので、地元の篤信の人達が背負子で雲峰寺の境内に運び、現在の場所に安置されたのである。

